

観光文化

Tourism & Culture

212

March 2012

特集◎九州新幹線全線開業で 「九州はひとつ」

— 開業後一年、九州ツーリズムの変化と
期待される地域活性化への取り組みとは？

◆巻頭言

九州新幹線全線開業

そこからつながる観光のネットワーク 唐池 恒二……①

◆特集

・九州新幹線は「九州はひとつ」に向けて大きな弾みに

— 全線開業、地域連携して九州観光促進の展開を図る 段下 倫……②

・九州新幹線全線開業による 新たな時代の「観光かごしま」の展開

鹿児島県観光交流局観光課……⑦

・肥薩おれんじ鉄道 過去・現在・未来

— 地域への鉄道の役割を果たすために 古木 圭介……⑫

◇研究ノート 三陸の観光復興

— 岩手県田野畑村の取り組み (4) 大隅 一志……⑮

◆連載

I あの町この町 第48回

天平の夢 — 宮城県涌谷町 池内 紀……⑳

II ホスピタリティーの手触り 69

トイレのおもてなし 山口 由美……㉔

◆新着図書紹介……㉘



茅葺き屋根・肥前浜宿

明けやらぬ早朝、東の空から薄ぼんやりと太陽のぞき始めたが、見る間に黒雲が覆い、ちらほらと小雪が舞いおり肌を刺す寒さが身を凍らせる。有明海に面した佐賀県鹿島市浜宿を訪ねたのは二〇二一年の真冬である。

写真の南船津地区は浜川河口の右岸に位置する。川沿いに茅葺き屋根の連なる景観は、往時をしのばせるに十分な雰囲気醸し出す。

一方、左岸に足を踏み入れると「酒蔵通り」と称される道路があり、土蔵造りの大型酒蔵群が多く残っており美しい光景を望むことができて楽しい。この宿場は旧長崎街道（多良往還）の宿場町で、江戸時代には鹿島藩の港町として商人はじめ船乗り、鍛冶屋などが住み、佐賀と長崎を結ぶ陸と海上の交通拠点で栄えたという。私もそんな歴史に触れたくて歩いてみると、武家屋敷や醤油蔵の重厚な建物が目に飛び込み心地よすがすがしさに浸ることができた。肥前浜宿は二〇〇六年「重要伝統的建造物群保存地区」として国の選定を受けたのである。

（写真・文 樋口健二）

二〇二一年三月十二日、九州新幹線は静かに全線開業を迎えた。

それから遡ること二年前の二〇〇九年、新しい観光列車「S-L人吉」「海幸山幸」を誕生させた。両列車の運行開始日には、沿線の全ての駅で集まってきた地域住民の方々が、列車へ向かって手や小旗を振り、やってきたお客さまを出迎えていただいた。この歓迎ぶりに、新しい列車を「自分たちの列車」として迎え入れる準備を進めてくださった地域の方々の強い思いを感じ、九州新幹線全線開業へ向けた新たな一歩を踏み出したと感慨を新たにしました。

JR九州では九州新幹線の全線開業に備え、多彩な観光列車をつくってきた。それは、新幹線の開業効果を、沿線のみでなく九州全体に広げたいという目標があつたことである。「新幹線からその先へ」の旅の魅力付けのひとつとなるのがこの観光列車である。

観光列車の運行は単に「そこに列車が走る」ということのみには終わらない大きな意味をもつ。

先に述べた両列車を例に取ると、列車の運行が決定してから運行開始を迎えるまで担当者で地元に入り、魅力的な地元の素材を地元の方とともに探しだしてきた。車内販売は地元ならではのものにこだわり、一時停車する駅では特産品の販売もお願いした。また、「S-L人吉」では沿線の国宝「青井阿蘇神社」のお祭りの際に食べられたというお弁

九州新幹線全線開業 そこからつながる観光のネットワーク

九州旅客鉄道株式会社 代表取締役社長 唐池 恒二

当を再現した駅弁「おごっつお弁当」を誕生させ、逆に「海幸山幸」については、新鮮な海の幸を楽しめる日南ならではの魅力を生かすため敢えて駅弁は作らず、沿線の施設をご紹介した。沿線地域では地元の方が自発的に列車に手を振る運動も始めていただき、地元による「おもてなし」の土壌も醸成された。ひとつの列車が走ることで、JR九州と地元とが一体となってお客さまをお迎えする態勢を整え、新しい観光素材、新しいおもてなしが誕生する。観光列車そのものが観光素材となり地元の新しい魅力を再発見することができるのである。

さらに「おもてなし」は広がる。駅から降りたお客さまが、より便利に観光を楽しめるよう地元の生活路線である「路線バス」を観光列車との連動した時刻で観光地を巡るルートに調整し、一日フリーで乗車できる商品として開発されたのが、指宿、霧島、阿蘇地区の路線バス一日乗車券である。これは当社担当者と地元関係者の協議により実現した新しい観光の足と言える。

新幹線開業後も「指宿のたまで箱」「あそぼーい」「A列車で行こう」などが加わり、新幹線+観光列車の旅はJR九州の看板となっている。新しい魅力を地元とともに発信していく、その姿勢にこだわり、観光のネットワークを広げていきたい。列車に乗るお客さまと地元の皆さまの笑顔に触れるたび強く思うことである。（からいけ こうじ）

九州新幹線全線開業で「九州はひとつ」

開業後二年、九州ツーリズムの変化と期待される地域活性化への取り組みとは？

二〇一二年三月十二日、東日本大震災の翌日に全線開業した九州新幹線。関西および中国地方、北部九州と鹿児島間が直通運転でつながり、九州全体への経済的な波及効果が期待されています。今号は、九州新幹線全線開業による、九州各地のツーリズムを通じた地域活性化への取り組み状況と今後の可能性を展望します。

九州新幹線は「九州はひとつ」に向けて大きな弾みに 全線開業、地域連携して九州観光促進の展開を図る

公益社団法人日本青年会議所 九州地区協議会

自立した経済力確立グループ

九州ツーリズム確立委員会 前委員長

段下 倫

自立した地域の創造

公益社団法人日本青年会議所九州地区協議会は九州各地（沖縄を除く）七十七青年会議所からの出向者で構成され、九州に住み暮らす青年経済人四千名の会員が、各地域から集い、さまざまな分野で運動・活動を繰り広げています。二〇一一年は、時忠之会長（長崎県大村市）の下「九州JAYCEE（注1）による自立した地域の創造」が事業計画とし

て策定され、推進してきました。

九州構想

理念は「九州人が、九州という枠組みで地域を捉え、目の前の諸問題を自律的に克服し、潜在的価値を発揮していくための構想です。」
二〇〇六年に規定された内容から選択と集中を図り、地域主権型道州制によって推進できる取り組みを明確化し「九州構想アクションプラン2010」（九州構想ホームページ

<http://kyushukos.org/>）を改訂して構想具現化の新たなスタートを切りました。自分たちの地域を「九州」という枠組みで捉え、「旧習力」と「吸収力」をベースに「経済成長」や「人づくり」に率先して関与し、それらを実践することで、「自立した九州」が実現できると考え、「経済力」「安心力」「人材力」「情報力」の四つの概念を定義としています。

二〇一一年は、九州新幹線鹿児島ルート全線開業を目前に控えていたこともあり、九州

ブランド確立委員会と九州ツーリズム確立委員会の二委員会が、自立した九州の経済力を観光分野の視点から活性化に結びつけていくと設けられました。

●九州ブランドの確立

雄大な大自然を持つ九州には、地域に存在する文化力が生み出した観光資源や食文化などが数多くあることから、地域特有のソフトパワーを生かした九州ブランドを確立し、地域経済の活性化を目指し取り組み始めました。各地特有の地域ブランドを一堂に集めた「地域活性化たから市」を大分の地で開催し、二十数社の賛同と協力を頂き多くの方々会場に足を運んでくださいました。物産展のようにも見られがちですが、私たちがこだわった地域性、文化力といった観点を重要視した構成にできたのではないかと考えています。

九月三十日〜十月一日に開催された「地域活性化たから市in名古屋」では、九州ブランドの確立を目指し、大分県由布院の牛乳と他六県の名産と呼ばれるお茶をブレンドしたアイスクリーム「うまいっ茶」を共同で考案し、クオリア（ワクワク感）を追求した感性価値の高い九州ブランドができたと考えています（写真1）。九州では、まだまだ各地に眠って



写真1 「地域活性化九州たから市」(大分市)で九州ブランドを発信

いるソフトパワーを地域ならではのブランドとして掘り起こすことが可能で、各地のブランドの確立やまちづくりにつながれると思います。

●九州ツーリズムの確立

九州観光による地域経済の活力浮揚に向けた九州ツーリズムを実現するため、九州ツ

ーリズム確立委員会の最初の取り組みは、九州各地の観光の現状を知ることでした。当時は、九州新幹線鹿児島ルートの開業を控えており、観光産業をはじめ幅広い分野の産業が、話題性や利便性の向上による経済効果を期待していました。そこで、素人同然の私たちが始めたのは、九州各地を自分たちの足で回り、その土地を肌で感じ食するといった、観光の原点に立ち返って体感するというものでした。

訪問する仲間をその土地の出身者がエスコートして、地元をPRするという方法です。簡単そうですが、実際にはなかなかうまくPRすることができなかつたり、知らないことがたくさんあつたりで、「自分の地元なのに……と恥ずかしくなった」という会員もいたのが現状です。繰り返し自分の足で回った結果、「九州の観光を考えるのであれば、もつと九州を知らなければいけない」ということが、皆の共通した実感になりました。

●九州観光促進スキーム

九州観光のスキームを勘案した結果、今の九州にとって最も重要なのは、地域と地域が連携を強めるということに至りました。どんなに魅力のある資源でも一つでは、二つの資

源の魅力に勝ることはないと考えています。一つより二つ、二つより三つと魅力ある資源が結ばれていくことは、人々の期待感を増幅させるはずで、言葉で言うのは簡単でも、実際はそううまくはいきません。観光産業を生業にされている方々にとつては、まずは自身の利益をしっかりと確保できなければ死活問題になります。まずはそれぞれの地域で利益をしっかりと確保し、次のステップとして、枠を超えた地域間の連携を図ることで、地域に新たな活性化の光を示すことが可能になるはずで。

●地域密着型の活動

歴史的に根づいた独特の地域性や文化は地域の魅力となる可能性を秘めているので、旅行者のニーズを捉えるキャッチコピーやテーマを打ち出し、インパクトあるイラストの魅力を考案すれば、地域外からの誘客に必ずつながります。近年ブームとなっている食文化の「B級グルメ」や、「くまモン」に代表される「ゆるキャラブーム」などが成功事例ではないでしょうか。私たちの強みの一つは、地域に根差した団体であるということです。であるならば、地域のプロフェッショナルとして、観光分野から地域の活性化に取り組む

青年会議所が、一つ、また一つと増えることが重要です。

そこで、九州内七十七(注)青年会議所の活動エリア内に点在する観光資源調査を進めました。メディアに紹介されるような観光資源はもちろん、地域の風物、地域独特の文化、地域の歴史等の情報を集約し、積極的に取り組まれている地域と全く取り組まれない地域に分類しました。実際に取り組むべき問題として見えてきたのは、観光分野におけるまちづくりの運動や活動に取り組む青年会議所が少なかったことです。

「九州ツーリズムフォーラム」地域の誇りを発信しよう！ 私たちのツーリズム」(二〇一一年九月十日、大分市)で次の点を発信しました(写真2・3)。

1. 観光産業の活性化が地域を元気にし、経済効果を生み出す
2. 観光の目玉となる資源を各地で見いだす
3. 地域経済を活性化に導く観光資源が身近にまだまだ存在する
4. 私たち一人ひとりが観光の重要性を認識する
5. 魅力ある資源は、地域を変える力を持っている

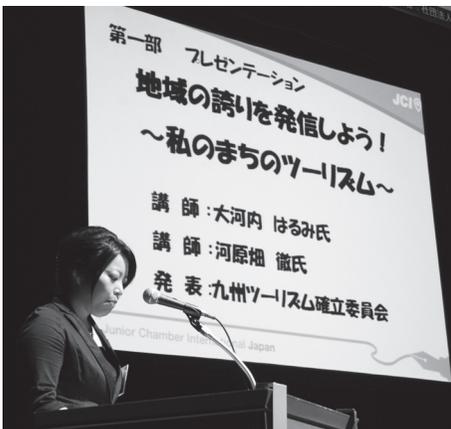


写真3 九州ツーリズム確立委員会によるプレゼンテーション



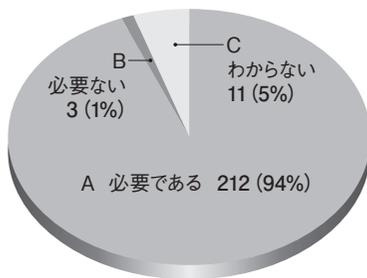
写真2 九州ツーリズムフォーラム九州地区大会。各地域からの熱いメッセージ

図表 公益社団法人日本青年会議所 九州地区協議会
九州地区大会2011 in 大分
「九州ツーリズム フォーラム」アンケート

Q7 今後も観光を切り口とした
地域経済の活性化が
必要だと思われますか。

	一般	JC	合計
A 必要である	82	130	212
B 必要ない	3	0	3
C わからない	6	5	11

観光による地域経済活性化の必要性



フォーラムには、各地の会員はじめ観光産業に携わる方々、大学生等多くの方々にご来場いただきました。参加者アンケートから、九四%の方々が観光資源による地域への経済効果は必要であると考えていて、観光を地域の経済効果につなげるには、地域の方々に現状を認識してもらおう機会を提供し続けることだと実感しました(図表参照)。

全線開業による交通インフラ充実 による九州産業界へのインパクト

九州新幹線は、二〇一一年三月十二日の鮮烈なデビューにより、あらゆる産業分野から九州観光の起爆剤として期待されています。新幹線駅を持つ各地では、官民一体となった開業イベントが準備され、多くの人々が地域の活性化を期待し、その日を待ち望んでいたのではないのでしょうか。

迎えた当日、各地で予定されていた開業イベントの多くは自粛され、九州経済界、観光産業や自治体には、苦しいスタートとなりました。一年後の現在、博多―鹿児島間を二時間強も短縮した九州新幹線の登場は、九州における交通環境を革命的に変革しました。従来この区間を移動するには、時間コスト(四時間三十分)が難点の陸路、費用コストの大きい空路、そして従来の特急列車でしたから、画期的な利便性の向上になったといえます。

●新たなライフスタイル

九州の玄関口博多駅と終着駅の鹿児島中央駅における駅周辺の再開発は、建設業界に大きな経済効果をもたらしました。また、交

通手段としての利用ばかりではなく、ショッピングに駅ビルへ出かけたり、「本場のもつ鍋が食べたいから博多に行こう」「黒豚のしゃぶしゃぶが食べたいから鹿児島に行こう」といった気軽な気持ちで九州を縦断できるようになったことは、九州人に新しいライフスタイルを生み出しました。このほかにも、九州新幹線の利用促進を図る施策や補助施策(駐車場の無料化)等、九州新幹線需要を狙った経済的支援も行われています。

●マーケット拡大に向けて

新幹線の終着駅が博多から鹿児島になったことで増加した九州内外の交流人口は、各新幹線駅近隣だけではなく、沿線地域の方々も感じているはずです。在来線の魅力アップを図ったJR九州の戦略は、各地の誘客イベントを増加させました。東日本大震災の影響による国内旅行ニーズの西日本への偏りも要因の一つではないかと思えます。

全線開業からの一年間は、各地での誘客イベントが多様多様に実施されましたが、二年目の課題は、定着した誘客イベントを継続的に開催しリピーターの確保に努めることです。九州には温泉地が数多くありますが、新幹線駅で温泉があるのは、新玉名駅だけで

す。ちよつと足を延ばせば、あちこちに温泉が湧き出ているのも九州の魅力です。今まで以上に、各温泉地が互いに手を取り合えば、必ず相乗効果は生み出されると思います。

●インバウンドマーケットの拡大

九州新幹線では、日本語、英語、韓国語の三方国語が車内放送され、車内には韓国はじめ東アジアからの旅行者と思われる団体を今まで以上に目にするようになりました。国際ハブ空港としての利便性の高い福岡空港に九州新幹線の利便性が加わったことで、韓国→福岡→熊本→鹿児島(宮崎)→韓国などの観光ルートが、新しい交流人口の流れを生み出しています。

九州内の空港の多くは、東アジア圏内とのアクセスが可能になっています。空路に加え、九州新幹線や在来線による交通環境の充実による魅力アップは、観光産業の大きな期待です。熊本天草では、「A列車で行こう」(在来線)と「天草宝島ライン」によるクルージング感覚の定期便運航が人気を博しています。九州新幹線を軸とした交通機関の連携による展開は、各地で取り組める方法の一つかもしれません。

●新幹線延伸による交通インフラ充実の影響

九州新幹線による経済効果に関して「観光業界(旅行業界、宿泊業等)への調査結果から、福岡、熊本、鹿児島の実績では四割が上向きになったと回答し、他四県では一割程度との回答であった」という新聞記事(注2)を読みました。鹿児島ルートによる縦断の利便性向上が生み出した効果であると解釈でき、五千億円の巨額を投じる西九州ルートの早期完成は、さらに期待が寄せられる事業です。

九州新幹線による飛躍的な交通インフラの充実を、九州一体となった経済波及につなげられるような各地青年会議所の運動や活動に期待していただきたいと思っています。

観光、ツーリズムへの期待とビジョン

「九州の自立した経済力」に向けて、青年経済人として社業を営み、各地で運動や活動を続ける私たちにとって、幅広い産業に経済効果をもたらす観光分野に取り組むことは必要だと考えています。活動するなかで気づいたことの一つに「地域間の連携による観光資源の魅力アップを進めたいが、なかなかうまく進まない」ということがあります。実益につながる産業であるからこそ、「おらがま

ち」「わがまち」といった損得勘定が生じるのだと思います。しかし、私たちJC(注3)の友情から生まれる絆は、この地域間に生じる課題もクリアできると考えています。

九州JCによるツーリズムの実現は、観光分野への情熱の歩みを止めない運動を発信し続けることが第一歩。そして、七十七(注4)の各地青年会議所にその必要性を説き、共に運動や活動を各地で実行してもらうことが第二歩。さらに、地域間の連携を成功に導くための諸問題を打破することを第三歩目として歩み続けることが、九州ツーリズムの実現につながるかと確信しています。

「九州構想」を軸に、九州新幹線の次のステップとなる交通環境の充実にビジョンを描くことで、九州の観光産業は、より一層の交流人口をもたらすはず。九州各地の青年会議所は、青年にしか描けないこと、青年だからできることを「九州はひとつ」を合言葉に邁進します^{まよ}ので、九州観光に旋風を巻き起こすことに期待いただきたいと思っています。

(だんした とも)

(注1) JAYCEE…青年会議所会員

(注2) 熊本日日新聞社二〇二二年二月二十三日朝刊掲載

(注3) JC…各地の青年会議所

(注4) 二〇二二年度は、屋久島青年会議所設立で、九州内に七十八青年会議所となる。

九州新幹線全線開業による 新たな時代の「観光かごしま」の展開

鹿児島県観光交流局観光課

平成二十三年三月十二日、九州新幹線鹿児島ルートが全線開業し、「新しい時代」を迎えた鹿児島県の観光について、観光客の動向や取り組みなどを紹介する。

鹿児島県の魅力

「本物。鹿児島県」

鹿児島県では、次のような本物の素材による本県の魅力を「本物。鹿児島県」というキーワードで広くPRしてきている。

(1) 自然

鹿児島県は、南北約六百キロにわたる広大な県土を誇り、日本で最初に世界自然遺産に登録された屋久島をはじめ、希少な野生動物が生息し、世界自然遺産登録に向けた取り組みを進めている奄美群島など特色ある島々を有している。

また、全国第二位の源泉数を誇る豊富な

温泉のほか、本年

三月十六

日の霧島

屋久国

立公園

の再編に伴い、新たな



温泉編
ポスター

に国立公園に編入される鹿児島湾（錦江湾）奥の始良カルデラなど、多様で豊かな自然環境に恵まれている。こうした大自然のなかで、雄大な桜島をはじめ、県内各地に広がる良

好な景観を眺めながら、悠然とした「スローライフ」の旅を満喫できる。

(2) 食文化

本県の豊かな自然環境は、農林水産業の優れた生産基盤を成し、豚、肉用牛、ブロイラー、サツマイモ、ソラマメ、養殖のブリやカンパチ、ウナギなど全国に冠たる「本物」

の素材とともに、焼酎や黒豚のしゃぶしゃぶなど、県内各地で育まれた多彩な食文化は、本県の魅力ある観光資源となっている。

(3) 歴史

幕末・明治期を中心に、時代のターニングポイントに重要な役割を果たしてきた鹿児島は、西郷隆盛や大久保利通など多くの偉人を輩出し、平成二十年の大河ドラマ「篤姫」の放映以降、篤姫ゆかりの地としてのイメージも定着してきている。

また、第十一代薩摩藩主島津斉彬（なまきり）によって鹿児島市磯地区に形成された日本最初の工業群（集成館）で培われた技術は、その後の日本の近代化に大きく貢献し、九州・山口に点在するこのような近代化産業遺産群について、関係の県や市と連携をとりながら、世界遺産登録を目指してきており、こうした歴史的意義を有する素材に恵まれている。

九州新幹線全線開業の意義

一九七三（昭和四十八）年に、全国新幹線鉄道整備法に基づき、九州新幹線鹿児島ルート¹の整備計画が決定されて以来、およそ四十年近くの歳月を経て、平成二十三年三月十二日に、南の鹿児島から北の青森まで、日本列島の南北が新幹線という一本のレールで結ばれることとなった。

全線開業により九州の南北軸が縮まって、博多から鹿児島中央までは最速一時間十七分、さらに一歩先の指宿や霧島など主要観光地が二時間程度の移動圏内に入ることとなった。

また、鹿児島中央―新大阪間は最速三時間四十二分で結ばれ、こうした全線開業の時間短縮効果により、北部九州や関西・中国方面からの観光客をはじめとした交流人口の増加が図られてきている。

さらに、九州新幹線的全線開業は、九州を中心とするエリアにとどまらず、北京―上海の中国高速鉄道、ソウル―釜山の韓国高速鉄道、釜山―福岡の高速艇などと並び、アジア地域において、特に持続的成長が期待される「環黄海経済圏」の高速交通体系に組み込まれ、その一翼を担う重要な交通基盤として位置づけられたところである。

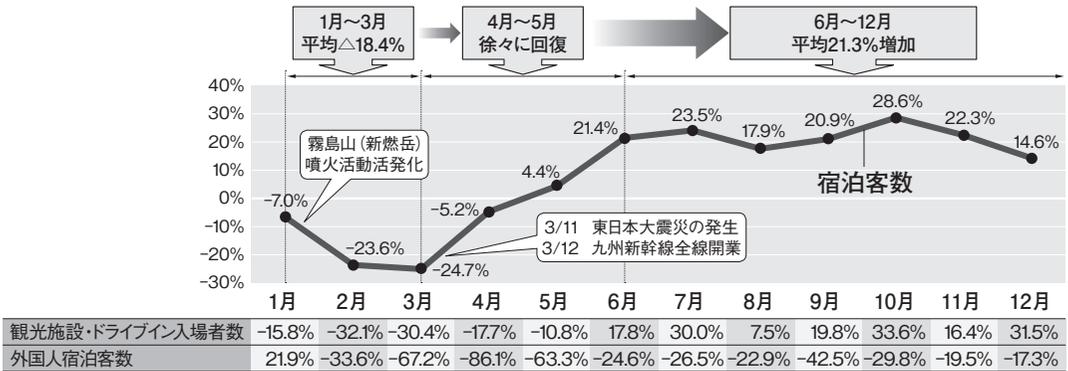
このため、例えば、ソウル、上海から鹿児島空港へ入国し、福岡まで九州新幹線を利用した後、福岡空港から出国するなど、新幹線を基軸としながら、福岡空港・鹿児島空港を利用したアジアとの新しい流れを形成し、更なる交流促進につながることが期待されている。このように、九州新幹線全線開業により、全線開業の「開」アジアに向かっての「開放」本物。鹿児島県の多様な素材が全国に「開かれる」という、まさに「開」をキーワードに、鹿児島が魅力ある地域へと発展していく「新しい時代の幕開け」を迎えたものといえる。

九州新幹線全線開業の 平成二十三年における 観光客の動向

県で月に一回、県内の宿泊施設等を抽出して実施している「鹿児島県観光動向調査」の結果によれば、一月から三月は、一月に活発化した霧島山（新燃岳）の噴火活動に続き、三月に発生した東日本大震災などの影響により、延べ宿泊客数は三方月の平均で対前年比一八・四％の減少と前年を大きく割り込む結果となった。

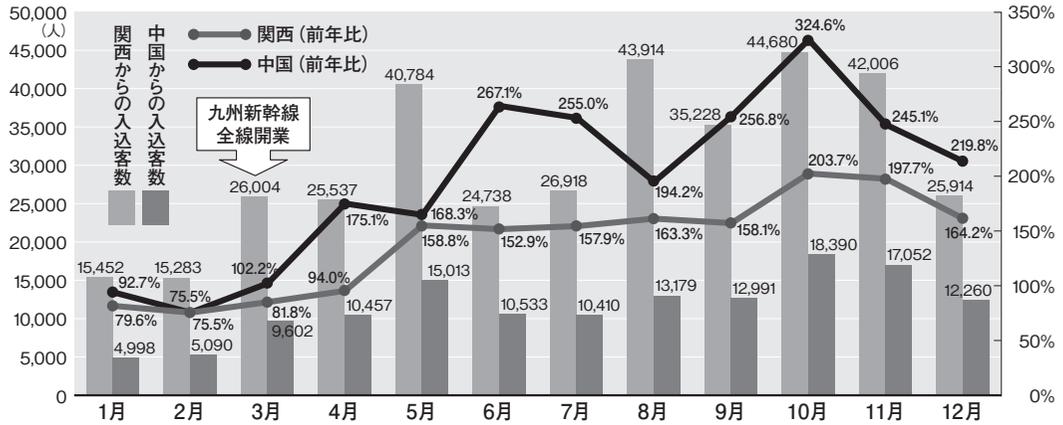
その後、九州新幹線等を利用した個人旅行による宿泊客の増加など、本県への入り込

図1 平成23年 鹿児島県 延べ宿泊客数（前年同月比推移）



（注）鹿児島県で主要ホテル・旅館66施設*と観光施設・ドライブイン19施設*を対象として、毎月サンプル調査を実施。
*調査対象施設は、月によって変更・増減あり

図2 平成23年 関西・中国地区からの宿泊客数の推移（鹿児島県観光動向調査）



みが徐々に回復し、五月には、対前年比プラス四・四％の増加、六月から十二月にかけては、平均で対前年比約二〇％を超える増加となっている（図一）。

発地別の動向としては、関西・中国・北部九州からの入り込みの伸びが大きく、特に、中国地区からの入り込みは、六月以降、平均で対前年比約二・五倍の伸びを記録するなど、九州新幹線全線開業効果が表れているところである（図二）。

また、県内地区別では、新幹線の終着駅がある「鹿児島地区」、本県の主要観光地である「指宿地区」「霧島地区」への入り込みが好調である。

特に、「指宿地区」については、鹿児島中央駅と指宿駅を結ぶ観光特急「指宿のたまご箱」が平成二十三年十二月末までの平均乗車率八六・三％と大変好評を博しており、その話題性を生かした取り組み等により、六月以降の宿泊客数は、平均で対前年比約五・四％の増加と好調に推移してきている。

一方、新幹線の終着駅である鹿児島中央駅や、主要観光地から遠距離にある地域や離島においては、観光客の入り込みは対前年では増加しているものの、交通アクセスの問題や大手旅行会社との協定旅館等が少ないこと

などもあり、主要観光地ほどの伸びは見られていない状況である。

九州新幹線全線開業に対応した観光振興の主な取り組み

- （一）全線開業を見据えた取り組み等（全線開業前）
- 平成十六年三月に鹿児島中央―新八代間で九州新幹線が部分開業して以降、全線開業に向けて、次のような取り組みを進めてきたところである。
- ① 鹿児島県観光プロデューサーの設置（平成十七年度）
 - ・ 広く民間の観点から本県観光全般をコーディネートし、プロデューサーする民間出身の専門家を設置。
 - ② 観光交流局の設置（平成十八年度）
 - ・ 五年後の九州新幹線全線開業を見据え、観光交流局を中心とした全線開業対策を実施。
 - ③ 新幹線効果活用プランの策定（平成十九年度）
 - ・ 「増やす・広げる・活かす」の基本的視点に立ち、「観光・交通」「産業」「まちづくり・イベント」の三分野で取り組むべき方策を取りまとめた「新幹線効果活用プラン」を策定。
 - ④ 鹿児島県観光振興基本方針の策定（平成二十一年度）
 - ・ 平成二十一年に議員提案により制定された「観光立県かごしま県民条例」に基づき、「観光立県かごしま」の実現に関する主要な施策を総合的かつ計画的に推進するための基本方針を策定。
 - ・ 「I 魅力ある癒しの観光地づくり」「II 国内外からの誘客促進」「III おもてなし先進県鹿児島づくり」の三つを柱に各種施策を推進。

(2) 全線開業後における観光振興の主な取り組み(平成二十三年度)

「鹿児島県観光振興基本方針」に掲げる三つの柱に沿って、次のとおり各種施策を進めてきている。

I 魅力ある癒しの観光地づくり

① 魅力ある観光地づくり事業

県単公共事業として、観光交流局を設置した平成十八年度に事業を開始以来、毎年度十億円を予算計上し、県内の主要観光地において、街並み景観や沿道修景などの整備を進めてきている。

② 体験・交流型観光ビジネスモデル確立事業

平成二十一年度から翌年度にかけて、体験・交流型の観光メニューを集積したイベント「かごしまよかとこ博覧会」を県内各地で開催し、地域の身近な観光資源の発掘・プログラム化を進めてきた。平成二十三年度は、旅行会社へのセーラズ等を通じて、体験・交流型観光メニューの旅行商品化を促進するなど、そのビジネスモデルの構築に向けた取り組みを進めてきている。

③ 二次交通アクセスの充実に向けた取り組み

九州新幹線全線開業に合わせて、新幹線終着駅の鹿児島中央駅と県内各地とを結ぶ直行バスや周遊バスの導入など、地域ごとに交通事業者や地元自治体が協力・工夫しながら、二次交通アクセスの充実が図られてきている。また、県としても、大隅地域までのアクセスとして、レンタカー無料プラン事業などを実施してきている。

II 国内外からの誘客促進

① 観光かごしま大キャンペーンの展開
県や市町村、業界団体、県観光連盟等で構成

する「観光かごしま大キャンペーン推進協議会」

が中心となって、新たな旅行商品造成の取り組みや、「かごしまもう泊」キャンペーン、JR各社など民間とタイアップした誘客キャンペーンを展開するとともに、関西や中国地区等でのテレビCMの集中放映、さまざまなメディアを組み合わせたPRなど、各種の誘客対策を実施してきている。

② 九州新幹線全線開業記念観光キャンペーンの展開

平成二十三年十月から十二月にかけて、鹿児島、熊本、宮崎の南九州三県と全国JRグループ各社が一体となったステイションキャンペーンを全国で展開し、キャンペーン期間中、JRグループによる全国規模での広報宣伝とともに、九州新幹線や在来線、バス等と組み合わせた旅行商品の一斉販売など、南九州への集客に向けた各種の取り組みを進めたところである。

また、このキャンペーンに合わせて、三月末までの期間、九州・山陽新幹線と宿泊を組み合わせた旅行商品の販売促進など、JR九州により、南九州を重点エリアとする送客キャンペーンが展開されてきている。

③ スポーツ合宿の誘致促進

プロスポーツや実業団、大学のスポーツサークル等のキャンプ・合宿誘致を中心に取り組みを進め、平成二十二年には、過去最高となる八百の団体、二万人を超える参加者の合宿を受け入れたところである(図3)。

今年度も、スポーツ合宿の誘致活動として、関西・福岡の大学生を対象に合宿セミナーや招待ツアーを実施したほか、春季プロスポーツキャンプ

図3 鹿児島県 スポーツキャンプ・合宿の推移

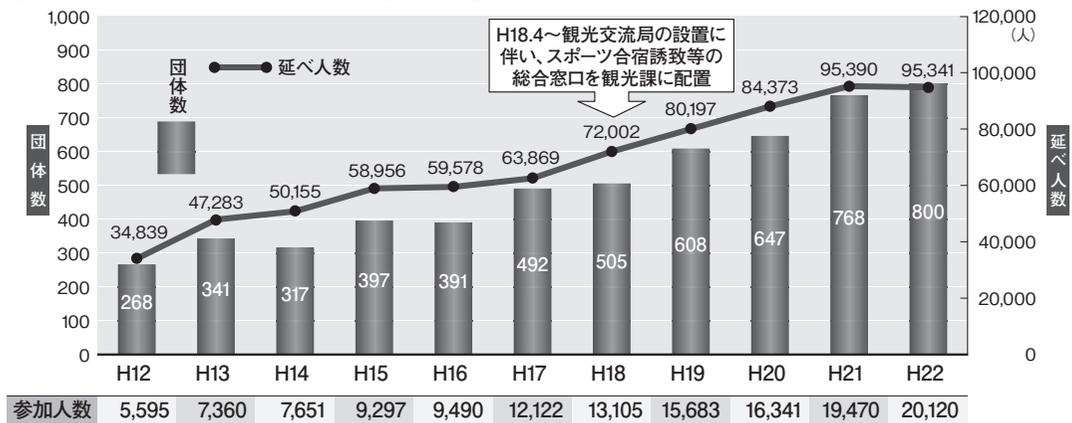




写真1 垂水の養殖カンパチ釣り体験(垂水漁業協同組合)

として十六チームを受け入れ、歓迎行事等を行ってきている。

④ 教育旅行の誘致促進

県や市町村、業界団体、県観光連盟等で構成する「鹿児島県教育旅行受入協議会」が中心となつて、誘致セールスや受け入れ体制の整備に取り組んできており、近年は、グリーン・ツーリズムとの連携による農家民宿などの受け入れ体制が充実してきている。

特に、関西や中国地区など新幹線沿線都市を中心とした教育旅行の誘致活動を進めてきている中で、養殖カンパチの釣り体験(写真1)が好



写真2 第1回おもてなしセミナー

評の垂水市(大隅半島)では、昨年度の三校から、新幹線全線開業の今年度は十一校の受け入れが予定されるなど、更なる増加が期待されるところである。

Ⅲ おもてなし先進県鹿児島づくり

おもてなしの先進県となるため、観光客を温かく迎えられるホスピタリティーの向上など、観光に関連するさまざまな分野の専門家等から地域づくりを学ぶ「かごしま観光人材育成塾」観光関係者の接遇向上を目的とした「おもてなしセミナー」(写真2)などを実施し、観光客の受け入れ体制の充実を図ってきている。

〈今後の展望〉アジアに向かって

開かれる観光かごしまを目指して

平成二十四年三月十七日のダイヤ改正で、山陽・九州新幹線直通列車は約一・五倍の増発が予定されているほか、平成二十五年には、関西地区から新幹線利用による教育旅行として、新たに五千人を超える二十五校の受け入れが決定するなど、更なる誘客につながる動きも見られるところである。

県としては、九州新幹線全線開業効果の定着と県内各地への波及・拡大を図るため、JRグループ等と連携しながら、各種の誘客対策に取り組むとともに、大隅地域など県内各地への周遊性を高めるための観光地づくりや着地型観光の推進など、「本物。鹿児島県」の魅力を最大限に生かした観光の展開を図ることとしている。

また、ソウル、上海との直行便に加え、本年三月二十五日からは、新たに台北との定期便就航が予定されており、アジアに向けた鹿児島陸・海・空の体制が充実するなかで、九州新幹線を組み合わせた観光ルートの形成など、中国をはじめ、アジアを中心とする海外からの誘客対策を一層強化し、国内はもとよりアジアに向かって開かれる観光かごしまの充実を図っていくこととしている。

肥薩おれんじ鉄道 過去・現在・未来

— 地域への鉄道の役割を果たすために

肥薩おれんじ鉄道株式会社 代表取締役社長

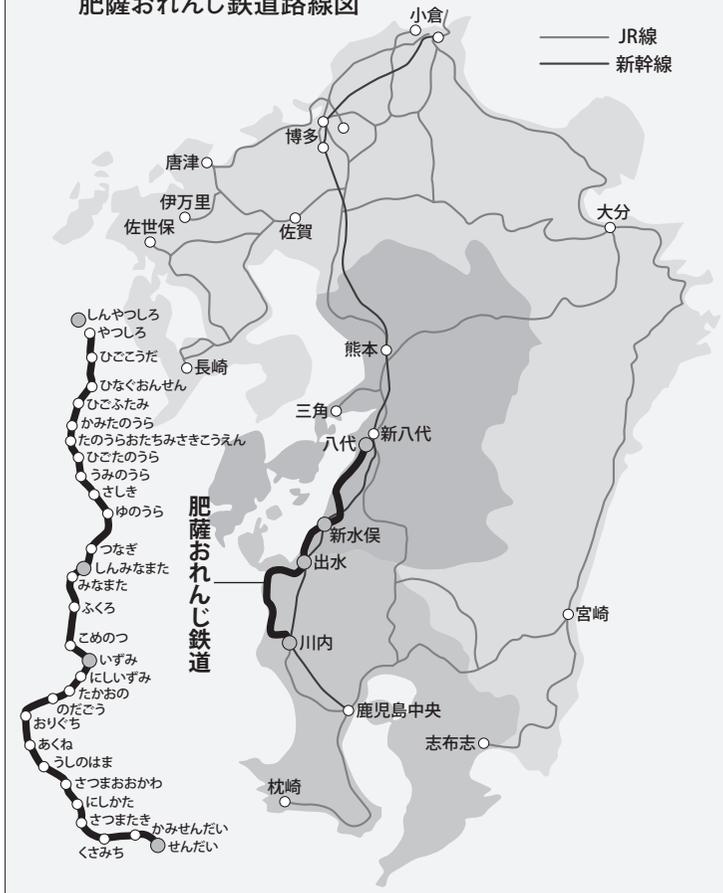
古木 圭介

二〇〇八（平成二十）年春、鹿児島県企画部交通政策課のT課長から電話が入った。当時、私の仕事は海外旅行を専門とするグローバルユースビュロー（本社・東京）の役員であった。T課長は折り入って相談があるとのことだったので、県庁へ出向いた。

旅行業から鉄道事業へのチャレンジ

話は、今度、肥薩おれんじ鉄道の社長が交代することになるので私にその役を頼めないか、との依頼であった。あまりに突然の話で、その場は考えさせてほしいと答え、持ち帰って、仕事のパートナーで東京の本社にいる兄弟に相談した。折しも鹿児島支店を閉鎖する時期であったのと、私も六十五歳を過ぎて旅行会社の現役の引退を考えていた時でもあった。兄弟は私さえやる気があるなら引き受けてはどうかと前向きな考えであった。

図1 九州新幹線と並行・交差して走る肥薩おれんじ鉄道路線図



その後、しばらく考えていたが十二月になって鹿児島県知事の伊藤祐一郎さんと会うことになり、「先輩お願いします」との一言に私も引き受ける決意を固めた。実は伊藤知事は私の高校の三期後輩にあたる。最後の社会貢献のつもりで「分かりました。やってみましょう」と返事をした。翌平成二十一年六月末の株主総会で代表取締役社長として、鉄道会社のリーダーとしての一步を踏み出したのである。

会社発足の経緯

一九八七（昭和六十二年）、国鉄が三七兆円という膨大な負債を抱えて六社に分割され民営化されたことは周知のことである。日本の交通の根幹を担い、国民の足として役立つてきた鉄道の歴史が大きく変わった時である。九州は九州旅客鉄道株式会社として発足した。折しも全国では新幹線の工事が各地で始まっていた。

九州新幹線鹿児島ルートも二〇〇四（平成十六）年三月に鹿児島中央―新八代間が部分開業した。

この開業を期に、鹿児島本線の八代―川内駅間の百十六・九kmがJR九州から切り離され、第三セクター方式のローカル線の会社

として「肥薩おれんじ鉄道株式会社」は発足したのである（図1）。株主は熊本、鹿児島両県と沿線の七自治体（八代市、芦北町、津奈木町、水俣市、出水市、阿久根市、薩摩川内市）とJR九州が採算に合わないということで手放した区間であるので、発足当初から赤字は覚悟であったはず。

しかし、私が就任して過去の記録に目を通して驚いたことがある。

開業前の売上予測を記した文章に「開業後九年間は黒字」と書かれているのを発見した。

黒字が予測されるならJR九州が手放すことはなかったはずだ。こんないいかげんな予測を誰が立てたのかは分からないが、立案にあたった方々はたぶん経営の素人だったのではないかと推測する。

とにかく華々しく開業した九州新幹線の陰に、住民の足としてひっそりと残されたローカル線が走り始めたのである。初代社長には東京の椿山荘の役員を務められたSさんが就任された。八代出身ということもあつたのである。当然ではあるが、翌年から赤字のスタートとなった。そして二〇〇九（平成二十一年）六月末をもって私にバトンタッチされた。開業五年目であった。

新しい出発

営業力は会社の要

就任した当初は驚くことばかりであった。

この会社に「営業部」がないことが第一の驚きだった。今まで私は民間会社で営業力をつけ会社の存続を担ってきたので、この会社はどのようなに稼ぐのだろうという単純な疑問だった。そこで早速「営業部」を開設した（写真1）。



写真1 営業部、最初の仕事“夢”プロジェクト「銀河鉄道999」初走行

その責任者となるK氏をヘッドハンティングしてきた。彼は私がかつて鹿児島地方銀行の依頼で第三セクターのホテルの再建事業に携わった時、一緒に汗を流した男であった。このホテルの再建事業には一九九二（平成四）年から二〇〇〇（平成十二）年まで従事し、社員の教育研修とリニューアルなどで就任後四年目から単年度黒字になった。今でもその黒字体質は続いているという。

ここでの再建の経験は今の鉄道会社運営にも大いに役立つている。気心の知れたK営業課長の働きで営業活動は急速に進み始めている。

取り組むべき課題

1. この会社には大きく分けて三つの課題がある。
1. 施設の老朽化に伴う安全対策
2. JR九州からの出向社員の高齢化とプロパー社員採用
3. 営業促進による運輸収入の促進

1. 鉄道で最も重要なのが「安全の確保」

また記憶に新しい、JR西日本の福知山線に象徴される事故のことが常に頭にある。弊社の線路は前述のとおり二〇〇四年にJR九州から譲り受けたもので、ほとんどの施設は中古であった。年々老朽化していく施設



写真2 補修が急がれるレール

をベテラン社員たちが日夜苦勞して保線をしている。国鉄時代、またJR九州になってからもその道で働いて技術を磨いてきた者ばかりであるので安心感はある。しかし技術でカバーできる限界もきている。この沿線は海岸を通るので塩害もあり陸にある施設より傷みが早い。信号機、レールや遮断機など早急に補修が必要になってきている（写真2）。

時にはイノシシとぶつかり工務の社員が昼夜を問わず駆けつけて処理をする。冬になると頻繁にイノシシが出没している。また時にはシカとぶつかることもある。これはイノシシより大きいので衝撃も大きい安全に支障が生じるほどではない。

主な施設の内訳は、

トンネル：二十カ所 延長距離約八キロ、
経年は九十年を超える

橋梁：二百五十八カ所、総延長は三十二キロ

レール：軌道延長は約百二十四キロで三十四十年使用しているものもあり、老朽化が進行

信号機：踏切百五十カ所（うち、信号機のない踏切十八カ所）

最近ではLEDの信号機に少しずつ交換しているので多額の費用がかかる。このように沿線が長いので、管理コストの改善と老朽化による施設の更新が急務になっている。

●ローカル線サバイバルと地方行政支援
もともと施設は国鉄があった時代にできており、当然国が管理していた。

しかし国の都合で一九八七（昭和六十二年）に国鉄は民営化されJRとなり、民間会社となったJRは採算が合わない路線は手放していった。

九州にはそのような形で生まれたローカル

鉄道(第三セクター方式で経営)が六社ある。それぞれ規模は異なるがみな経営に苦慮していることは共通している。分離されたローカル鉄道の沿線は人口が少ないところばかりである。最も金のかかる施設整備費用まで稼げる鉄道路線はどこにもない。

そこで熊本県、鹿児島県は補助金により弊社を支援しているが、膨大な設備の補修には応じきれない。弊社の線路はJR貨物が一日四本ほど走っているの線路使用料をいただいて設備補修の一部に充てているが、老朽化が進んでいるので追いつかない状態もある。二〇二二(平成二十三)年度からは新たな法律ができ「貨物調整金」という形で補助がくることになり大変感謝している。今後十年余りで設備補修費は二十五億円と試算している。

2. 人材育成が大きな命題

この会社の発足にあたってはJR九州と協定が結ばれていて、会社設立後十年間は九州から八十九名の出向社員を派遣するという内容である。それも来年二〇二四(平成二十六)年三月で終了してしまう。

私が就任する前はプロパーの社員はほとんどいなかった。二〇〇九(平成二十二年)六月の就任時に、あと五年で協定が終了と聞い

た時は目の前が暗くなった。なぜなら八十九名の出向社員は全員技術者集団で運転、工務、電気、検修と各分野でなくてはならない重要な人材である。新しい社員を入れて明日から役立つという者たちではない。

私はプロパー社員採用の立案を直ちに命じた。遅ればせながら将来に備えて採用と養成(教育)を開始した。運転士の免許を取得するには八カ月かかる。一人で運転を任せられるまでには更に四カ月ほど要し、結局一年しなければ新しい運転士にはなれないのである。運転士だけはアウトソーシングでできない仕事なのだ。

二〇二二(平成二十三)年十二月、念願のプロパー運転士二名(二人とも二十四歳)が第一線の運転士としてデビューした。親が子供を見守るような気持ちで彼らの運転ぶりを見守った。

今年も六人がJR九州の研修所で勉強中なので一日千秋の思いで彼らの卒業を待っている。そのなかの一人は鉄道には珍しく二十六歳の女性で、大阪から強い意志を持って弊社を受験してくれた。デビューできた折には全国的に話題になるのではないかと楽しみにみた。

保線関係の社員も徐々に若返りを図ってい

る。この仕事は鉄道においては縁の下の力持ち的な地味な仕事なので今どきの若者が続くかどうか心配ではあるものの、会社の目指す社会貢献を彼らと分かち合いながら期待を込めて応援している。

3. 営業力の強化

●地元のためにマーケットを拡大

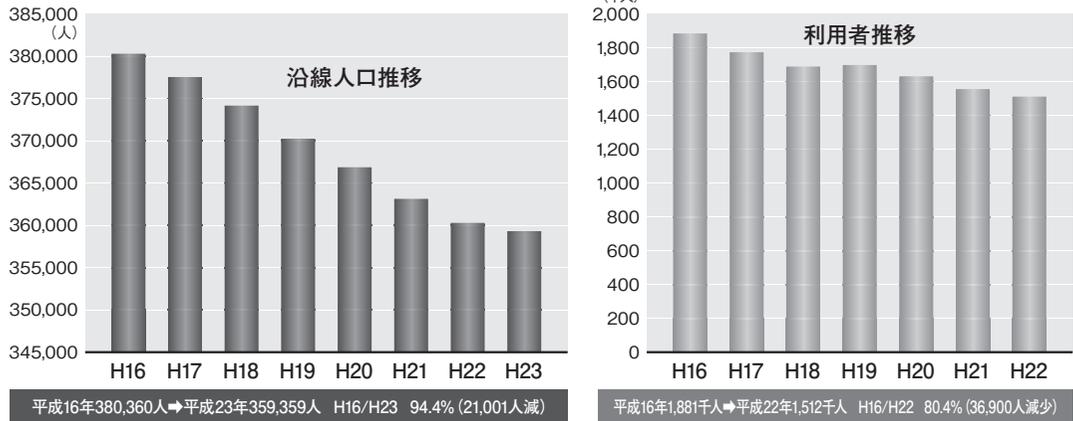
おれんじ鉄道の抱える営業的な問題は、当然ながら毎年の乗客の減少と運輸収入の減少である。その大きな要因は沿線人口の減少(二〇〇四(平成十六年)三十八万人→二〇二二(平成三十三年)三十二万人)である(図2)。さらに年々延伸する南九州西回り自動車道完成のたびに乗客の一部が便利なマイカーにシフトしていく。

図3で示すとおり乗客の大半は通学の高校生である(七一%)。しかし収入は定期券以外が五六%を占めている。通学定期券は約八〇%の割引となっている。

そこにもってきて二〇二二(平成三十三年)三月には九州新幹線が博多駅から鹿児島中央駅(旧西鹿児島)まで全線開業した。これでまた通勤客の一部が新幹線通勤にシフトすることになった。

沿線の多くの生活者にとっては、通学、買

図2 沿線人口推移と利用者推移

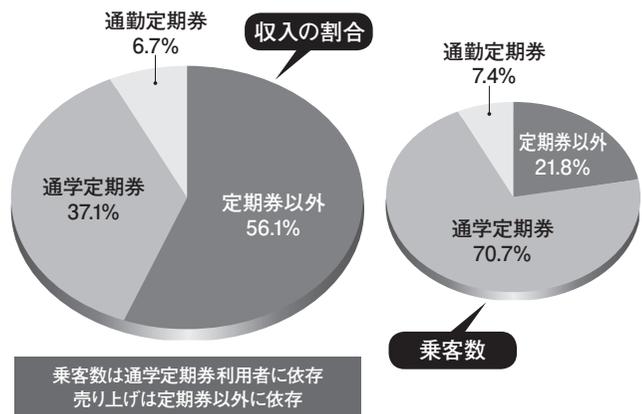


い物、病院通いなどにはローカル線がなくてはならない公共交通機関である。運転免許証を持たない交通弱者は、高齢化の地域ではますます増えている。

地元利用者に依存している赤字がますます増大するばかりである。

新たな営業戦略として交流人口(＝観光客)を増大させる策を練り、営業活動を始めた。当初の狭いマーケットを九州全域に拡大し、さらに関東、関西の大手、中小エージェント

図3 乗客数と収入の割合 (平成22年度実績から)



に新しい観光地の売り込みを実施してきた。

●東アジアマーケットもターゲットに

さらに南九州からは関東より近い韓国へ出掛けていった。

韓国最大の旅行会社と提携でき、二〇二二(平成二十三)年度には一千名もの送客をいただいた。東日本震災後は、夏ごろから再び送客が始まっている。

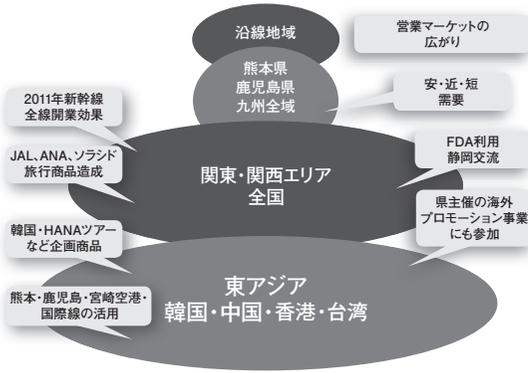
また台湾からの送客もプロモーションの成果が出て徐々に伸びてきた。今年三月二十五日から中華航空が台北―鹿児島に週三便就航する朗報もあり、ますますアジアの観光客誘致に力が入ってきた。マーケットは日本国内に限らず膨大な人口を抱える中国をはじめ、次第に豊かになっているアジアの国々まで広げていきたいと考えている(図4)。

●新幹線と観光列車による相乗効果

もちろん一番の効果を生み出しているのは新幹線全線開業である。JR九州の観光列車も満席で、なかなか予約が取れないようだ。

営業部が設立されてから多くの臨時貸切列車を運行している。二〇〇九(平成二十二年)度は六十四本、二〇一〇(平成二十二年)度は百二本、そして二〇二二(平成二十三)年度には百二十本(見込み)を超える貸切列車の需要がある。これは今後まだまだ伸び続けるで

図4 地域から海外へとマーケットを拡大



あろう。
 しかしいつかはこれも飽きられるので、今年には新たに観光列車の導入をも計画している。幸いにも水俣市を通じて環境省の予算がつき、車両改造ができる運びとなった。観光に特化した列車で、車内エンターテインメント、バラエティー豊かな食事、車内販売などを用意して、観光客が飽きないメニューを考えている。
 沿線各地の市町の産業が空洞化するなか、今後の主力が「観光産業」となることは間違いない。地元にも小さいながら経済効果をも

たらしている。観光客に地元の豊富な食材を使用した駅弁を提供したり、地元産の農産物の加工品を車内販売したり、最近では駅でのマルシェ(地元産品市場、写真3)も好評である。

今後の経営

今後の経営の厳しさは変わらないと思うが、本来「公共交通機関」という意味から「国」の設備に対する支援をより多くして、上を走らせる鉄道事業では赤字を縮小させる工夫と



写真3 阿久根駅でのマルシェ

努力をしていく経営にすべきであろう。中にはバスに替えたらいという意見もあるが、鉄道とバスの役割は根本的に違う。鉄道が廃線になってその地域が急速に疲弊していった例は枚挙にいとまがない。鉄道そのものが観光資源にもなり得る交通機関である。
 ここで国も県も地方自治体ももう一度「公共交通」の在り方を考える時ではないかと思う毎日である。

(こぎ けいすけ)

三陸の観光復興

岩手県田野畑村の取り組み(4)

財団法人日本交通公社 主任研究員

大隅 一志

東日本大震災から一年が経過したが、被災地域では、復興計画の策定やそれに基づく国への復興交付金の申請などが進められている。当財団が支援している田野畑村の観光を中心とした村復興の状況を引き続き紹介する。

復興庁が発足

二〇一二年十一月に東日本大震災の本格的な復興策を盛り込んだ今年度第三次補正予算が成立。歳出総額十二兆一千億円のうち、復興関連は九兆円超に及ぶ。

二〇一二年二月十日には、こうした東日本大震災復興の復興事業を統括する「復興庁」が震災から十一カ月経つてようやく発足した。復興事業の予算要求から配分までを一元的に行う。復興庁の目玉は、「復興特区」と「復興交付金」で、交付金は二〇一二年第三次補正予算と二〇一二年年度予算案を合わせて一兆八千億円が用意されている。被災地域の各自治体では、復興予算の獲得に向けた準備、復興交付金の申請手続きなどの取り組みが

加速している。一月末の第一次申請締め切りには、田野畑村を含め七県七十八市町村が約三千九百億円を申請した。

大詰めを迎えた

田野畑村災害復興計画の策定

田野畑村が進めている復興への取り組みの現状を整理して確認しておきたい。

●「事業ありき」にならない復興に向けて

岩手県では、沿岸の被災地域の十二自治体すべてがこれまでに復興計画（基本計画）を策定済みである。しかし、計画のレベルには差があり、実施計画についてはまだほとんどの自治体が策定中の段階にある（二〇一二年二月末現在）。

田野畑村においても、三月上旬の第七回災害復興計画策定委員会の開催を経て、三月末に策定が完了する予定である。

村では一月の復興交付金申請期限に合わせてすでに申請を行った。委員会での復興実施計画の策定が完了していない段階だが、予算

確保に向けて村による並行的な準備・申請の作業となった。本来なら、実施計画の策定に基づく計画的な事業申請が然るべきプロセスではあるが、実施計画策定の難しさのなかで、少しでも早い復興への準備が求められている現実を鑑みれば、やむを得ない進め方と言えよう。

ただし、陥りがちな「事業ありき」にならないためには、村の復興の大きな方向性を見失わないよう復興委員会と村との十分な連携が何よりも重要と言える。委員会のかじ取りが今後のカギを握るのではないだろうか。

●継続的な協議が進む復興実施計画策定作業

二〇一二年二月上旬、村の復興計画の部門別検討チームの第二回合同会議が開催された。主な検討内容は、集落再建、コミュニティ再生、福祉、水産業復興および観光復興であった。合同会議では、グラウンドデザイン、防潮堤のあり方や浸水エリア活用の方角性など、観光復興とも深く関わる村復興への重要事項について集中的に協議された。それを受け、三月上旬には第七回村復興計画策定委員

模型を前に浸水エリア周辺のあり方について検討を重ねる復興計画策定委員会の検討チーム合同会議



会が開催され、村の復興計画の最終取りまとめに入っている（写真）。

復興事業における 観光の脆弱な位置づけ

前述したように、岩手県の被災十二自治体ではすでに復興計画（基本計画）が策定されており、田野畑村を含めたすべての自治体は復興計画において何らかの形で観光による復興を盛り込んでいる。水産業の復興とともに、これまで三陸地域を支えてきた観光の復興が、被災状況に差はあるが、どの地域にと

っても復興に欠かせない課題として認識されていることがうかがえる。

一方で、国の復興交付金制度において、観光復興に係る事業の位置づけは必ずしも優先順位としては高いものとはなっていない。同制度において、対象となる事業は「基幹事業」と「効果促進事業」で構成されている。前者には、道路整備や土地区画整理、防災集団移転促進、漁業漁村集落整備など、被災自治体の復興地域づくりに必要なハード事業を幅広く一括化したもので五省四十事業から成るが、観光関連事業は含まれていない。

観光に係る事業は使途の自由度が高く、自治体それぞれのハード・ソフト事業ニーズに対応できる効果促進事業の中で盛り込んでいくことになり、基幹事業と一体となつてその効果を増大させる事業として位置づけられている。基幹事業との関連性が求められるなど、申請にあつたのハードルは低いとは言えない。田野畑村を含む被災地域が観光復興事業を着実に実施していく上では、復興における観光の役割の重要性や、基幹事業との連携による相乗効果の高い観光事業の実施が、いかに説得力のある形で描けるかが問われている。

生活基盤再生につながる 観光復興の可能性

二〇二二年一月、第七回JTB交流文化賞部門で、六十二応募作品の中から『観光文化』

211号 研究ノートでも紹介した田野畑村の事業が最優秀賞を受賞した。対象となつたのは、「漁村の暮らし体験が地域を再生する『番屋エコツーリズム』（NPO法人体験村・たのはたネットワーク）」であり、人や文化との交流による地域活性化の事例として表彰された。評価されたポイントは、「地域の伝統的な生活様式である『番屋』を体験観光のソフトとして活用し実績を積んできたが、一般の震災で多大な被害を受けた。その影響がまだ後を引いているなかで、被災地見学、防災教育という新たな体験の視点を加え、果敢に地域の人々の手による着地型観光をいち早く復活させた熱意と敬意を表したい。着地型観光を通じた交流の復活がエンジンとなり、漁業、地域の復興につながることを祈念したい」となっている。

ハードの部分とソフトの部分が表裏一体となつて、復興へのプロセスの一翼を観光が担うことの必要性和重要性を認識しながら、復興計画の具体化を進めていくべきと考える。

この時期では、村の復興計画の策定結果も含めて、震災後の一年の歩みを総括することは難しい。観光復興の方向やそのプロセス・手法被災地復興における観光の役割や観光の生かし方、被災地・観光地支援のあり方など、田野畑村への支援を通じた三陸地域の観光復興のあり方については、できれば次号以降で検証・総括することとしたい。（おおすみ かずし）



連載Ⅰ
あの町この町
第48回

天平の夢 ——宮城県涌谷町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト)著者

取材のときのルールにしているのだが、初めてこの町では、まずここがけることがある。おおざっぱな地形を頭に入れたあと、もっとも手近な高みをめざす。まわりを見わたせばいいのだから、デパートがあれば最上階、坂があればのぼりつめたところ、高台に神社が祀られていたりすれば願ってもない。

その一点に立って町をながめる。翼を持たない悲しさ、飛び立つわけにはいかないが、ほんの少し鳥の目になったつもり。上からの視点で全体像を脳裏にきざむ。

そのあと、ようやく町歩きにかかる。ただし、さしあたりは地図にも資料にもあたらない。注意深く町並みを見る。建物、店がまえ、看板、標識、行きかう人……。まだ何一つ知らないところだから、すべてが新鮮である。自分を未知の中に投げこむと、全身が鋭敏になる。

「エート、この角は——」

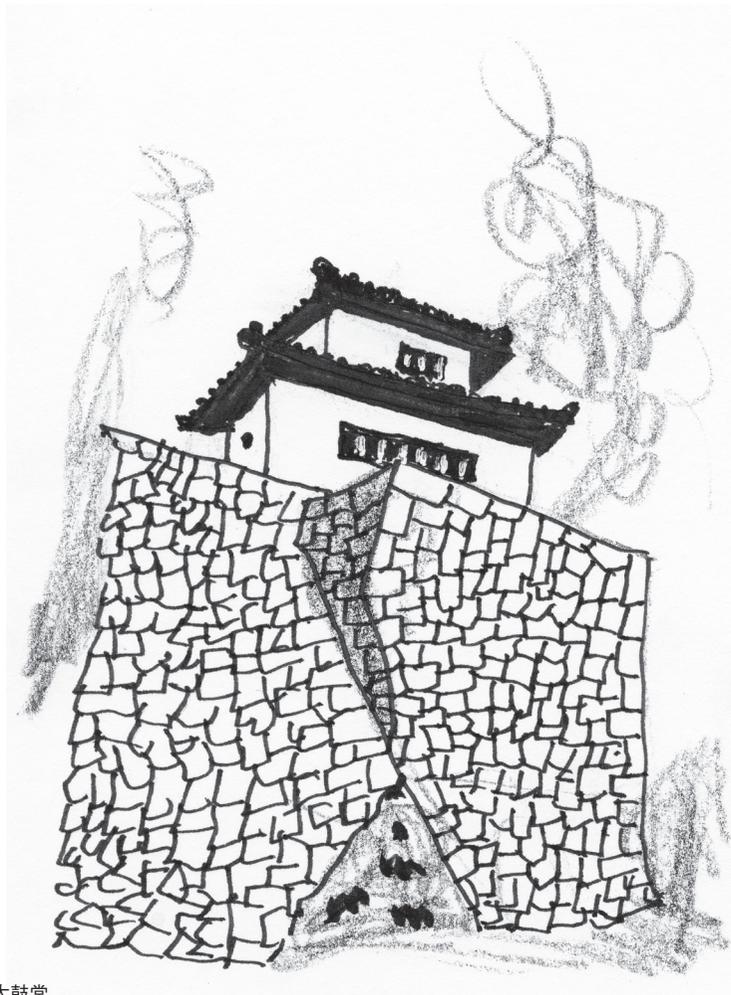
先ほど曲がった町角なのか、それとも一つ手前なのか。五感に道案内をさせると、日ごろ眠っている第六感が目覚めるものだ。地図や観光資料をひらくのは、ひとまわりしたあとでいい。情報に案内役をさせると、目は情報の伝えることしか見ないし、頭は情報の述べることしか考えず、感覚はひたすら怠惰になる。

宮城県遠田郡涌谷町^{とよたのくわくやちよ}。仙台平野のただ中にある旧城下町。私自身、城下町の生まれなのでよく知っているが、まっ先に城の石垣をめぐらせばいい。きつと絶好の眺望が得られるものだ。

JR涌谷駅からつづく中央通りの左に町役場、右に観光案内所。寄りたいのを我慢して、自分のルールに従い、トットと歩いていくと川つぶちに出た。対岸に石垣がのび、

先端に再建されたとおぼしい城が見える。橋を渡って石垣をめざしたところ、異様なものと対面した。太い石柱が礎石を突き上げるようにして倒れている。涌谷神社の大鳥居であつて、東日本大震災の傷跡である。

仙台伊達藩は藩内の要所に重臣を配して居館をつくらせ、「要害」と呼んでいた。だから涌谷城も正確には涌谷要害であつて、伊達一門の砦といったものだったのだろう。たしかに砦にふさわしい地が選ばれており、一方は谷、もう一方は川、石垣は南北に細長く、ふつうにいう城跡とはずいぶん勝手がちがう。石段をのぼりつめたところの城に見えるのは天守閣を模したという史料館で、こちらも大地震の損傷があつて立ち入り禁止。予期したとおり、石垣の上からの眺めがいい。川向こうには櫓^{しほ}ですいたように家並みがのびている。涌谷伊達氏が拝領した知行地は



涌谷要害の太鼓堂

約二万二千石だったというが、江合川、北上川、迫川はさまという用水に恵まれ、名うての穀倉地帯だった。東には藩米の積出し港石巻を控えている。居館をいたたく宿場町は、地域経済の拠点として賑わっていたのではなからうか。

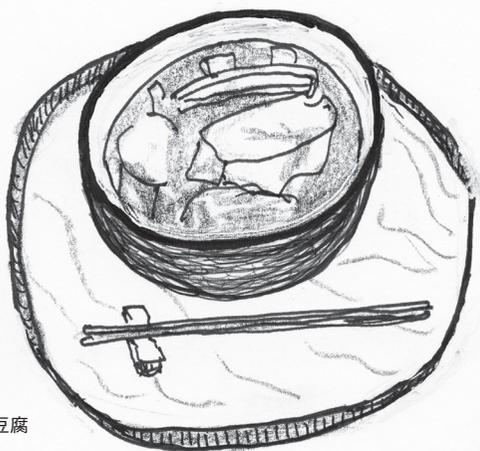
その豊かさが遠因になったかもしれない。涌谷はいわゆる「伊達騒動」と深くかかわっている。四代藩主幼君亀千代の後見役が藩政を壟断しているとして、涌谷伊達家第四代安芸宗重が同志をつとめて幕府に上請した。寛文十一年（一六七二）三月、幕府大老の裁定を迎えたなかで、審問の休憩中に反対派の原田甲斐が宗重を斬死させた。

前代未聞の事件である。真相はわからない。作家山本周五郎は『樅ノ木は残った』で、奸臣とされる原田甲斐の名誉回復を図ったが、事件後に後見役政治の肅正があつて仙台藩安堵となったところを見ると、どちらの主張が通ったのか、ほぼわかるのではあるまいか。

登城路わきの石垣が押し出されたふうに出はっている。大地震のせいかと思つたが、石組みそのものは整然とかさなり合つてそびえており、上に天保四年（一八三三）再建の太鼓堂がある。これをつくる際に、わざと出

ばって築いたらしい。そんな増築分があったのに、南北三〇〇メートルをこえる雄大な石垣は、いささかのくろいも見せていない。

なんとなく当地の成り立ち、性格に触れた気がして、町にもどってきた。観光案内所は「夢shopわくや」といって、若い女性がテキパキと仕事をしている。冬のさなかで観光は休業の時期だが、shopの名のとおり、特産品の展示やPRの役も担っているからだ。焼きまんじゅう「涌谷太鼓」、名菓「伊達桜」、白あんくるみの「わくやさま」、奥州涌谷かりんとう……。歴史のある町におなじみだが、もてなしのお伴がいろいろ多彩である。ほかにも切り餅、伊達ソバ、揚大角、城山ゆべし、仙台みそ、郷土料理がおぼろ豆腐におぼろ汁。涌谷竜文塗といって、古来の秘法「墨流し」を利用した漆器も特産の一つ。ストープにあたりながら、お茶とかりんとうのお相伴にあずかった。町のキャッチフレーズは「伊達騒動ゆかりの地」だが、実はもう一つあって、「わが国最初の産金地」。パンフレットの表紙にうつすと、大仏さまが浮き出ている。知る人は少ないだろうが、かつて当地は日本最大の金の産地だった。町名にしてもゴールドラッシュのさなか、谷に涌くように砂金探しの人がいたことに由来する



涌谷おぼろ豆腐

という説もある。ふしぎなことに奥州の要害地と、金と、奈良の大仏が、ここで結びつく。ぐずぐずストープにへばりついていたのは、暗い空から涌くように雪が舞い落ちていたからだ。町役場駐車場の車が、どれも白い帽子をのせている。小やみになるのを待つて、思いきりよく立ち上がった。

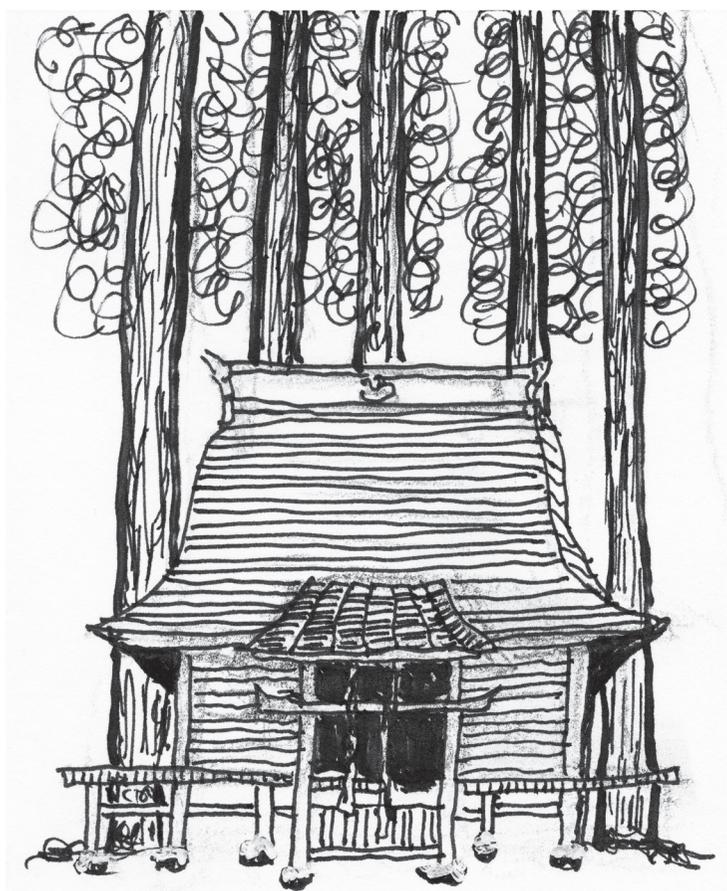
車で十分ばかりの郊外である。町の北東部には加護坊山、ののだけ崑岳山の二つの山が並んでいるが、崑岳山の山裾が舌のようにのびた一角、涌谷町涌谷字黄金山こがねやまと地名まで豪勢だ。参道はまっ白の絨毯を敷きつめたぐあいだ、枝葉に積もったのが、やにわにドサリと落ちてくる。こんな日にお参りにくる人もいないとみえて、振り返ると、わが足跡だけが謎の侵入者のように一筋つづいていく。奥まったところに小振りの簡素なつくりの黄金山神社が肅然と雪につつまれていた。

天平時代は八世紀半ばにあたるが、聖武天皇が莫大な国費を投じて大仏を建造中だった。銅像は完成に近づいたが、鍍金とぎんのための黄金調達が思うにまかせない。政府の面々が頭を悩ましていたところへ、「陸奥国守百済王敬福」より「小田郡黄金山」産出の黄金九百両（約十三キロ）が届けられた。天皇は直ちに諸国に知らせるとともに年号を「天

平感室」と改め、さらに大赦や税の免除をしたというから、天にも昇るよろこびぶりがかがえる。

「陸奥国始めて黄金を貢る。ここに幣を奉りて畿内七道の諸社に告ぐ」

『続日本紀』のくだりは、この件を指している。



黄金山神社

「わくや万葉の里 天平ろまん館」は参道入口の国道に沿ったところにあつて、瓦葺き、朱色の円柱をもつ長い回廊をつたつて行く。なにか懐かしい気分させるのは、修学旅行で行った奈良・東大寺を連想させるせいだ。回廊を飾る垂れ幕も、ハナやかな天平の色模様。歴史館、砂金採り体験場、研修室、直売所、

レストランを併設して、なかなか大きい。「天平」のキーワードが町おこしの柱に据えられているのが見てとれる。たしかに血まぐさいお家騒動よりも、天平の黄金のほうを夢を大きくふくらませてくれる。

それにしても「陸奥国守百済王敬福」とは何者だろう? 「小田郡」が現在の遠田郡と、どう結びつくのか? 歴史館が映像と立体模型で遠い時代の謎を解き明かしている。朝鮮半島で百済国が減じたのは天平より九〇年ばかり前のことで、そのとき多くの百済人が日本に逃れてきた。奈良王朝はこの人々に陸奥の地を与え、リーダーに「百済王」の称号を許した。渡来人のなかにさまざまに工人がいて、とりわけ金鉱にくわしい者が北上山地の含金礫層に目をつけたらしい。洪水などで洗い出され、金の純度がきわめて高いのだ。王朝の悩みのタネを聞き及び、リーダー敬福のもと採金にはげんで、渡来の恩返しをしたというわけだ。

当時、越中国の国守は大伴家持といった。役人としてよりも歌人として知られた人で、さっそく「陸奥国より金を出せる詔書賀賀ぐ歌」をつくった。長歌並びに反歌三首の構成で、反歌の一つが「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く」。

展示には長歌全文がオリジナルと読み下して掲げてある。なんの気なしに目で追っていて気がついた。

海行かば 水浸く屍かほね

山行かば 草生す屍くさむす

つづくのが「天皇の辺にこそ死なぬ」。第二次大戦中の有名な国民歌謡の一節である。「天皇のために死ぬ」ことをすすめた歌は、もともと黄金出土のよろこびを天皇に伝えるにあたり、レトリカルに忠義を示したまでのこと。軍部がつまみ取りして悪用した。

ゴールドラッシュはその後もつづいたらしく、天平感宝から天平勝宝と改元して四年目、陸奥国多賀郡から北の成人男子に黄金を納めさせる法を出した。砂金は流水を利用して洗い取る。谷々が人々で湧き返った。

展示の一つの「涌谷町の黄金マップ」によると、町内二十五カ所が採金の跡で、黄金はごま、黄金沢、黄金洗井といった地名が伝わっているという。

「いまでもとれますよ」

ろまん館の「砂金採り体験場」で手軽に体験できる。係の人にすすめられたが、ザルのような容器で採土を水で漉す。雪景色の中では思うだに全身がふるえ上がる。念のためにはたずねたところ、手軽にとれても、とて

も採算には合わないそうだ。

天平産金のことは千年ちかく忘れられ、江戸後期になって、にわか探索が始まった。具体的な手がかりは家持の歌にある「陸奥の小田なる山」のみで、当然のことながら、いろんな説が出た。ひところは「金華山説」が有力だった。地名からして「金の花（華）咲く山」にびったりである。江戸末期の伊勢の学者沖安海が涌谷の黄金山説を説き、のちの発掘作業が確定した。黄金山神社境内には「日本黄金始出地」碑の大きな石柱が建てられているが、歴史が証明済みなのだ。

町役場の正面に「企業誘致推進中」の横断幕が掲げてあった。町からすると企業の進出こそ黄金かもしれない。「涌谷町商工会の開発特産品」が示してある。特産品振興会がPRにとめているが、フランス鴨の農場をおこして、独自の技術のもとに鴨の胸肉やサラミをつくっている人がいる。おいしいササニシキを使った草加風煎餅、古くから食されてきた「ゆべし」に工夫を加えた「城山ゆべし」。涌谷は椎茸の産地であって、たっぷり椎茸を入れてとろみを出した新おぼろ汁。石巻をはじめ海岸の町々が壊滅的な被害を受けたなかで、内陸の町々が支え役をつとめ、東北復興の重責をになっている。

「涌谷町くがね創庫」といって、ホール、ギャラリー、図書室を合わせもつ建物が駅近くにある。ちょうど涌谷高等学校書道部・美術部合同展をやっていて、若い、いきいきとした力作がところ狭しと壁を埋めていた。また大震災被災者支援の巡回展、町ゆかりの染色画家の回顧展。展示や会議、サークル活動に自由に使える。

冬のあいだは寒々しいが、城山公園で桜まつりの催される四月になると、町はいちどに甦るのだらう。城跡といったモニュメントをもち、すぐ下の川原が運動場のように広い。涌谷伊達家の歴史、天平のロマンという二大テーマをそなえている。小さな町で、これだけ好条件に恵まれたところも珍しい。

春には古くから人間を助けてきた馬による鞍馬競走と優雅なつるしびな。夏は絵灯籠が通りを照らす夏まつり。かつて黄金を産したお山崑岳山には由緒ある崑峯寺が霊地を護まもっていて、探燈大護摩供の古式ゆたかな行事がある。秋は山唄大会、冬は崑岳白山祭。近隣の町村の大半が平成の大合併で町域がむやみに拡大したなかで、涌谷は旧来の町を守ってきた。人間のスケールに応じたのがいいのであって、そこにはきつと、四季おりおりに人をたのしませる「装置」が控えている

ものである。

観光案内所の女性に「わくや天平の湯」をすすめられた。駅から車で五分あまり。クアハウス型の太浴場、ヘルススパの打たせ、寝湯、季節風呂、サウナ、露天風呂。

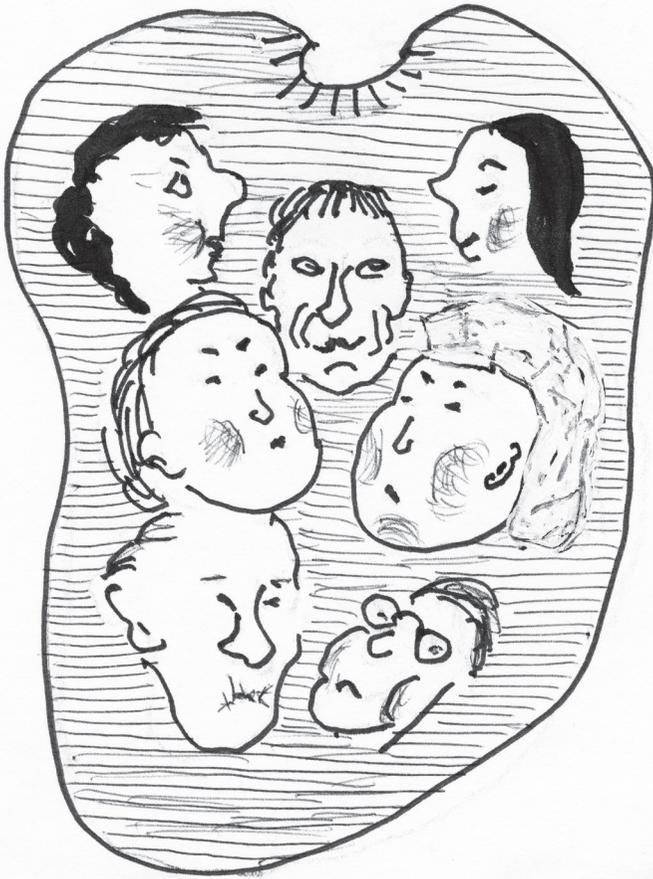
「一日いてもいいですよ」

そんなに長くはられない。

「夕方からは割引です」

一日八〇〇円のところ、午後五時からだと五〇〇円。勤め帰りの人を考えている。

田んぼの中に忽然と巨大な建物があらわれた。温泉のほかに交流室、研修室、休憩



わくや天平の湯のお仲間たち

用大広間、さらにレストランと小劇場が付属している。同種のを各地で見たが楽屋付き小劇場のあるのは初めてだ。いいアイディアである。サークルやグループの発表会、演劇集団の公演、何にでも使える。「楽屋付き」というのが用意周到である。体験した人は知っているが、発表のホール以上に裏手の空間が重要なのだ。

大浴場は古代のローマ風呂のように大きく、サウナは北欧式のドライサウナ、まん丸い露天風呂のまわりには雪景色がひろがっていた。雪のただ中に全裸でいるというのもヘンなもので、文明はそんな奇跡をこともなく実現する。

つい欲ばってお風呂を全部ためしたので、湯疲れして、しばらく大広間で寝そべっていた。そんなとき、まわりのおしゃべりがたのしいのだが、土地ことばがまじりこんで半分もわからない。お湯の効能か、女性はみなさんふつくらした天平美人に見える。

二階のレストランからは崑岳丘陵が見わたせる。黒い杉林に雪がかぶさり、白黒のまだら模様が一幅の日本画である。空と接するところに金色をあしらうと、黄金山に早変わりするのはなかるうか。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り69

トイレのおもてなし

旅行作家

山口 由美

最高のクールジャパン！

最近、とかく人気の低迷する海外旅行だが、
どうして海外に行かないのかと聞いた時、面
白いことを言う人がいた。

「だって、ウォシュレット（注：正式にはTO
TOの登録商標。一般には温水洗浄便座などとい
った呼び方だが、以下、便宜的に一般名詞として
使用）がないじゃないですか」

これを聞いて、無意識に何となく国内旅行
を選んで自分の深層心理に気づかされた
人もいるのではないだろうか。

すっかり、日本人の日常生活になくてはな
らないものとなったウォシュレット。今では、
南極の昭和基地や、ANAやJALの新型航
空機、ボーイング787などにも導入されて
いる。

だが、これは携帯電話やスマートフォンと
違い、世界的な現象ではない。日本で誕生し、
ガラパゴス的に日本で高度な進化を遂げ、日
本においてのみ、人々の生活に欠かせないも
のになってしまった、極めて日本的な生活家
電なのである。

以前、日本をテーマにしたドキュメンタリ
ー番組で、慣れない日本で奮闘する取材記者
が、ホテルのウォシュレットにびっくりする
シーンを見たことがある。カルチャーショッ
クの象徴がウォシュレットであることに、こ
つがびっくりさせられた。

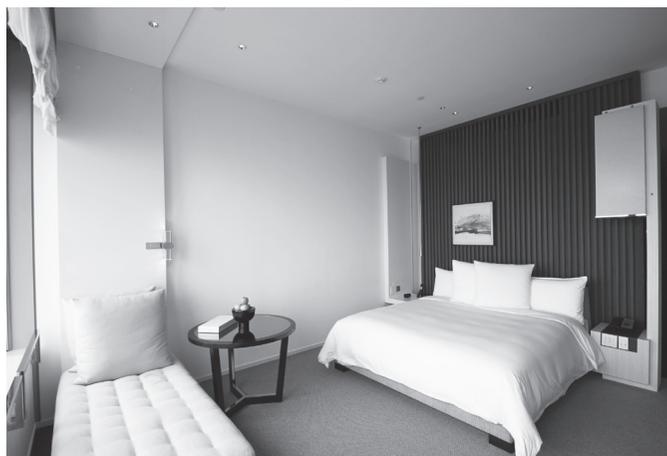
一方、あるホテルのコンシェルジュに、こ
れまでに一番困った質問は、と聞いたら、ウ
ォシュレットがすっかり気に入ってしまった
VIPが、お土産に大量のウォシュレットを
買って帰りたいと言い出し、数をそろえるの
に苦労したこと、と言われたこともある。

日本を旅する外国人にとってウォシュレッ
トは、最初はびっくり、でも、慣れてくると、
持つて帰りたいくなる、そんなものらしい。

『世界一のトイレウォシュレット開発物語』
（朝日新書／林良祐著）によれば、「アメリカ
をはじめとする海外では、便器に電気製品を
載せるということや、お尻を洗うといったこ
とに抵抗感を持つ人が多く、家庭や公共トイ
レで普及するには時間がかかっている」とい
うが、実際に使ってみると、その気持ちよさ
にはまってしまう人が多いという。

その感覚、温泉に似てはいないだろうか。
一昔前まで、外国人は裸で大浴場になんか入
らないもの、とされていた。ところが、今や
温泉は、海外からの観光客にも大人気である。
スシだってそうだ。外国人は、生魚なんて気
持ち悪くて食べられなかったはず。それが、
外国人にマグロを買い占められる時代である。

パークハイアット上海の
和風テイストなバスルーム
トイレは別の個室になっている



だが、トイレは、温泉やスシと違って、それが旅行の目的にはなりにくい。でも、日本が気に入ったというリピーターの中には、無意識のうちにウォシユレットがないから海外へ行かなくなっている日本人のように、無意識のうちにトイレが心地よくてつい日本に来てしまいう旅行者がいるかもしれない。

近年、中国では、急速にウォシユレットが普及している。もともと中国は、トイレが快適でないことにおいて特筆すべきお国柄だったが、だからこそ言うべきか、経済成長とともに、快適なトイレを求め始めたのである。

二〇一〇年の上海万博は、中国のウォシユレットの普及において、ひとつの分岐点だったかもしれない。上海では、万博を前にしてホテルの開業ラッシュが続いたが、あるラグジュアリーホテルの幹部から、痛恨の極みといった感じで告白された。

「実は、客室にウォシユレットをつけなかったのです」

日本にも進出しているホテルブランドである。ウォシユレットを導入するかどうかが議論になった。しかし、中国ではまだマニアックな装備だろうという判断をしてしまった。ところが、時代は、彼らの判断を追い越していたのだ。ウォシユレットを入れなかったこ

とは、そのホテルプロジェクト最大の後悔になつたらしい。

上海の浦東にそびえる高層ホテル、パークハイアット上海は、早くからウォシユレットを導入していたホテルのひとつだ。

TOTOの、センサーで自動的にふたが開くウォシユレットが装備されている。

日本人のフロントオフィスマネジャーがこんな話をしていた。

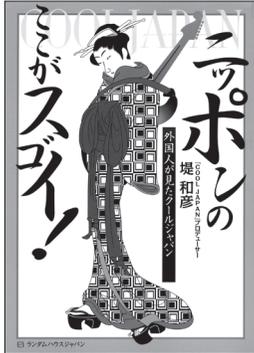
その昔、海外のホテルには、日本人を専門に相手するゲストリレーションズとか、セールスマネジャーがいたものだ。ところが、今やそういう役職はすっかり一掃されてしまい、彼がそうであるように、その人がたまたま日本人だった、という状況でしか、日本人スタッフはいなくなりつつあると。

確かに、そういう話を世界のあちこちで聞くようになった。感慨深い思いで部屋に帰り、トイレに入る。日本製ウォシユレットのふたがパコンと開いた。もう一人、日本人スタッフが現れて「こんばんは」と声をかけてくれたような気がした。

ウォシユレットに込められた日本のおもてなし。日本という国の意外な魅力と潜在力は、トイレにあるのかもしれない。

(やまぐち ゆみ)

新着図書紹介



四六判 255ページ
定価 1,300円
武田ランダムハウスジャパン

二〇一一年十月に発売された由紀さおりと米国のジャズバンド、ピンク・マルティニーとのコラボレーションによるアルバム『1969』が、世界各国で高い評価を得ている。ネット配信では、米国のジャズチャートとカナダのワールドミュージック部門で一位を獲得、英独仏をはじめ欧州各国や南アフリカなど二十カ国以上で販売されているCDも、売り上げが二百六十万枚を超えた。

由紀さおりが「夜明けのスカット」でデビューした一九六九年にはやっていた「ブルー・ライト・ヨコハマ」「夕月」などの歌謡曲を日本語でレコーディングしたアルバムが世界各国で受け入れられているのだ。昭和歌謡の奇跡。とも言っべき事態は、新たな「クールジャパン」の発露と言えるかもしれない。

「ニッポンのこごスゴイ!」外国人が見たクールジャパン(堤和彦著/武田ランダムハウスジャパン)は、NHK衛星放送で二〇〇六年四月からスタートした番組「COOL JAPAN」の制作を担当する著者が、六年以上も続く人気の秘密を現場の視点から紹介しつつ、外国人の目を通して見えてきた日本の魅力を訴える。フランスでの日本文化イベント取材した著者に、現地の男性が「少し前までフランスには日本の古い伝

統文化しかなかった」「それはエリート向けの文化でした」と語る。「でもマンガは大衆文化」「フランスに初めてやってきた大衆文化がマンガなんです」と続く言葉は、日本をめぐる旧態依然の状況を打破する上で、クールな日本のポップカルチャーが果たした役割の大きさを示唆している。

しかし、著者は番組制作を続けながら、「クールジャパン」という言葉は単にポップカルチャーだけを指すのではなく、日本文化を広くカバーしている」と思い始める。番組で取り上げるテーマを日本式サービスや「真面目で正直で礼儀正しい」日本人の心・暮らし方などへと広げていくなかで、「そうしたものをすべてがいまや「クールジャパン」といわれている」ことに著者は気づいたのだ。

二〇一二年三月に発生した東日本大震災では、その空前絶後とも言っべき事態のなかで被災地の人々が示した冷静沈着な行動は、世界中から賞賛された。本書では、「COOL JAPAN」の出演者でもあるイタリア人の発言が引用されている。

「日本がどんな国なのか明らかに became と思います。互いに敬意を払い、ルールを守り、人々が強い絆で結ばれている国と知ったのです」

冒頭で触れた「昭和歌謡の奇跡」とも言うべき現象も、世界へ向かう「クールジャパン」の潮流と無縁ではないだろう。海外の人たちは、意識するしないにかかわらず、清涼で透明感あふれる由紀さおりの歌声を通じて、はるか彼方の「クールジャパン」へと思いをはせているのではないか。そんなふうにも思えてならない。

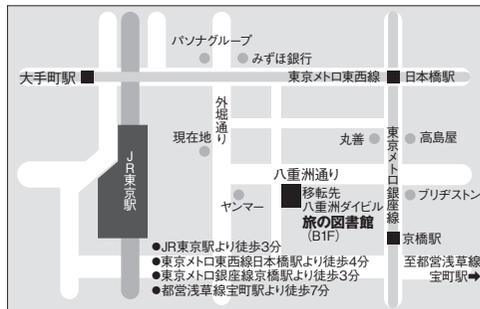
著者は今こそ「クールジャパン」を世界に広めるべきだと提言。留学生と外国人観光客を増やし、海外で日本物産展を開いて、放送やインターネットでも情報を発信しようと呼びかけている。

(挑全)

旅の図書館 移転のお知らせ

財団法人日本交通公社は、観光文化の振興を願い、1978年10月から「旅の図書館」を運営しております。これまで図書館のありましたビルの建て替えに伴い、4月2日(月)より、下記に移転いたします。皆様のご利用をお待ちしております。

移転に伴う休館：3月19日(月)～30日(金)
移転先での開館：4月2日(月) 10:00から
移転先：東京都中央区京橋1-1-1 八重洲ダイビルB1F
TEL:03-3516-6100
(東京駅八重洲地下街 2番通り25番出口より直結)



財団法人 日本交通公社 出版物のご案内

●地域のどろどろに学ぶ、インバウンド推進のツボ
外国人旅行者の誘客をめぐる激しい地域間競争を勝ち抜くのは簡単ではありません。地域特性や強みを徹底的に磨き上げることで差別化を図り、旅先として高めた価値すなわち「どろどろ」何かを持ち合わせていなければ、存在は埋没してしまいます。こうした点を踏まえ異なる特徴を持った六つの地域の「どろどろ」を紹介し、地域によるインバウンド推進の「ツボ」を明らかにしようとしています。二〇二二年五月発行。



●旅行年報 2011 最新刊

直近年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料を基に分析、日本人の国内・海外旅行・外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を望める冊子。二〇二二年九月発行。



●旅行者動向 2011 最新刊

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自の切り口で分析グラフや図表を多用して分かりやすく解説。
二〇二二年十一月発行。



●心が動く、ヒットの方程式に学ぶ、ソーシャルメディアに声を聴く

当財団主催「第十六回海外旅行動向シンポジウム」採録集。昨年七月のシンポジウムでは、存在感が高まってきたソーシャルメディアの特性を学びながら、そこに見える消費者の心の動きとヒット現象について迫りました。これまでは「経験」や「勘」のマーケティングに頼らざるを得なかった「クチコミ」や「街のうわさ」のメカニズムがブログやSNSなどソーシャルメディアの台頭により分析可能になっています。従来のアンケート調査ではなかなか見えなかった深層心理をブログから読み解く例など、観光分野に応用できるヒントを紹介しました。なおこの採録集は、当財団ホームページ「出版・刊行物」→シンポジウム採録集」のページでPDF公開しています。ダウンロードしてご利用ください。二〇二二年十一月発行。



※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。
担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部
電話 03・52656607 http://www.jtb.or.jp

次号予告

●今年五月二十日に開業予定の東京の新たなランドマークとして注目される東京スカイツリー®。次号は、「東京スカイツリー®の景観形成と観光資源としての考察」をテーマに特集します。

研究調査たより

●当財団が携わっている岐阜県白川村の事業の関連で、リビングヘリテージ(住民生活のなかに生きている文化遺産)のつ、韓国の河回村を昨年十二月に訪れた。河回村は韓国の伝統的な暮らしや生活文化を最も深く知ることのできる、韓国を代表する文化遺産である。洛東江(韓国最長の河川)を望みながら遊歩道を歩くと村に入り、徐々に懐かしさのある農村風景が広がる。日本の農村とはひと味違う路地、茅葺きの民家や書院等を体感することができる。立ち寄った民宿ではおばちゃん(韓国伝統茶)とても親切にもてなしてくれたことも良い思い出になっている。

●河回村の観光地としての特徴は、観光客用の飲食店や土産品店、駐車場を村から二キロほど離れた場所に集中して配置している点にある(村内には村民が運営する民宿数件の店があるのみ)。村の中心部に入るには、村の入り口で入場料を払い、徒歩あるいはバスでアクセスする。観光による収入は、住民が遺産と共存して生活するための費用にも充てられる仕組みになっている。

●河回村では生業の場と、観る対象としての生活の場を明確に区分し、さらに住民が観光によるメリットを直接的・間接的に得る仕組みをつくることで、遺産の保全と地域社会の持続的発展を両立しようとしている。

●わが国のリビングヘリテージの多くは、生業の場と観る対象としての生活の場が渾然としていて、そこに河回村のような仕組みを導入することは難しい。しかしわが国には住民自らが遺産の保全と地域社会の持続的発展のバランスを考え、未来に伝えていくために創意工夫してきた歴史がある。河回村の例に学びつつ、わが国の特徴である「住民自らの取り組みに適した遺産保全と地域の持続的発展を両立する手法」を探ってきた。(中野)

編集後記

●昨年三月十日に博多―鹿児島間で九州新幹線全線が開業となり、関西圏・中国地方と鹿児島間も直通運転でつながった。二年を振り返って、全線開業の新幹線が九州内にとどまらず、全国的な波及効果をもたらした。開業前日(三月十日)に発生した東日本大震災原発事故で、予定していた開業記念行事が自粛、中止となるなど、厳しいスタートだった。しかし、開業直後は鈍かった西日本方面への人の動きが徐々に回復し、九州新幹線の利用客数は増加していった。

●全線開業した九州新幹線が九州を南北に縦断することで、官民体となって九州がひとつになるうとして、九州観光推進機構は理念として「九州はひとつ」を掲げて観光立国・九州を目指している。全線開業を軸に九州各地における観光・ツーリズムや地域の活性化の影響、今後の期待を探った。

●新幹線と在来線とを組み合わせた鉄道ネットワークによる九州全体での観光促進と地域活性化へのビジョン、九州新幹線終点の南九州の観光促進や新幹線と並行するローカル鉄道の取り組みと今後の展開について描いていただいた。若手経済人の皆さまが九州地区青年会議所独自で地域資源を掘り起こして、地域に根差したツーリズムにより地域活性化へ取り組む活動について知ることができた。

●東アジア圏が九州インバウンドマーケットとしてますます重要になってきた。北九州と南九州とを時間的に短縮した九州新幹線全線開業が韓国や中国からの訪日客増加のインパクトとなり、低迷する日本のインバウンド旅行を西から活性化させる起爆剤になることに期待したい。

●当財団が関与している事業「三陸の観光復興―岩手県田野畑村の取り組み(4)」を研究ノートとして掲載した。東日本大震災からおよそ二年を経て復興が立ち上がり、復旧復興に向けて、二元的な動きが加速されることに期待が寄せられる。(片桐)



観光文化 第212号

第36巻2号通巻第212号

発行日：2012年3月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F
〒100-0004 ☎03-5255-6071
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F 観光文化事業部内
〒100-0004 ☎03-5255-6090
<http://www.jtb.or.jp/publishing/>

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載